

<h1 style="font-size: 2em; margin: 0;">小 さ き 声</h1>	No.151 1975.3.15 〒 189 東京都東村山市青葉町 4-1-10 多磨全生園 松本馨
---	---

復活

・・・道を急いでダマスコの近くに来たとき、突然、天から光がさして、彼をめぐり照した。彼は地に倒れたがその時「サウロ、サウロなぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。そこで彼は「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねた。すると答があった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。さあ立って。町には行って行きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が告げられるであろう」。サウロの同行者達はものも言えずに立っていて、声だけは聞えたが、だれも見えなかった。サウロは地から起き上って目を開いてみたが、何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いてダマスコへ連れて行った。(使徒行伝 9:3~8)

若い頃、私は聖書に病人の癒しと、復活の記事がなければ、信仰に入り易く、どんなによいだろうと思った。心おどらせながら山上の垂訓を読み、次に癒しの記事に接する時、熱した心は冷水を浴せられたように冷えてしまった。イエスの復活の記事になると、おとぎの国の物語りを読んでいるようで、聖書全体が霧か、夢を見ているような気持ちに

なってしまう。

この聖書がリアルなものとして私にせまったのは、回心を通してである。そのとき以来、復活は、私の心を捕えて離さない。私が復活と言うとき、そこに十字架が重なっている。また、十字架と言うとき、復活が重なっている。では復活をいかにして知ることが出来るのだろうか。或る人は復活を心理的に解し、内的経験だと説明する。若しそうだとすれば、禅の世界と本質において変らないものになってしまうだろう。然し、復活はあくまでも、歴史的事実であり、出来事なのである。パウロは第 1 コリント 15 章で、次のように言っている。

わたしが最も大事なこととして、あなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、ケパに現われ、次に 12 人の兄弟たちに、同時に現われたことである。そのうち 5 百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数は今なお生存している。そののち、ヤコブに現れ次に、すべての使徒たちに現れ、そして最後に、いわば、月足らずに生

れたわたしにも現れたのである。(コリント 15 章 3 ~ 8)

パウロは最後に月足らずの自分にも現れたと、イエス復活の証人として名乗りを上げている。パウロとイエスの出合いは、劇的なものであった。彼は熱心なユダヤ教徒であり、キリスト教徒をユダヤ教の敵として抹殺するために、ダマスコへの道を急いでいた。その道中で「サウロ、サウロ、何故我を迫害するのか」のイエスの御姿に接し、地上に倒れ臥してしまった。同行の者は、その声は聞えたが、御姿を拝することは出来なかった。ここで私達が教えられるのはイエス御自身であることである。主イエスは御自身を現そうとするものに現し、かくそうとするものにはかくされていることである。

復活は、同じ場所に居たからといって、誰にも見えるものではないのである。唯、信仰によってのみ見ることが出来るのである。

然し、現代では、直接復活のイエスを見ることは出来ない。イエスは昇天し、神の右に座して居給うからである。今日私達が復活のイエスを知るのは聖霊に依るのである。ヨハネによる福音書記者が記しているように、イエス昇天後は、イエスに代って聖霊が私達の内に働き給う。この聖霊の働きに依って、聖書は生ける神の言として私達の内に語りかけているのである。そのみ言葉をきくとき、復活のイエスを知るのであ

る。人格的なイエス・キリストと、その十字架と復活を受け取らされるのである。それ故に私達の目がかくされている限り聖書をいくら読んでも、生ける神のみ声は、きこえて来ない。聖書は律法として私達を苦しめる。

人間の側からいくら求めても、生ける神を知ることは出来ない。神は御自身を現そうとするものに現すからである。然し、求むるものには、必ず与えられるであろう。これは矛盾であるが、事実なのである。

或る友へ

2月14日

或る人から、信仰を犠牲にして、ハンセン病患者のために日夜労苦している私に、感謝すると言う意味の言葉を頂きました。私はこの言葉を聞いて、全くの誤解であると思いました。私はハンセン病患者のために信仰を犠牲にしていると考えたことは一度もなく、むしろ逆に、ハンセン病患者のために労苦することが、信仰に益となっています。益となっているというより、ハンセン病患者のために労苦することは、信仰そのものなのです。

本誌に「よきサマリア人」のことを書きましたが、強盗に襲われて、傷つき倒れている旅人とイエスが重なっていることに、私の自治活動の根拠を見出しました。つまり傷ついた旅人に仕えることは、イエスに仕えることなのです。

私は、信仰には二つのタイプがあると思っています。それは、よきサマリア人と傷ついた旅人をそのままにして、宮に急ぐレビ人、祭司長です。そのいずれもが、神に仕えるための行為であり、信仰の質と言えましょう。

私は、犠牲という言葉をおあまり好みません。この言葉は、政治権力を握った者が、弱者を搾取するに使う言葉だからです。また、犠牲ということが人間同志の間に、軽々に起ってはならないからです。

私は、15才の時に発病し、そのとき以来抑圧と搾取される位置に立たされました。強制隔離収容所で、弱者の悲哀をいかに多く味ったことでしょうか。隔離収容所には、逃亡や所内秩序を乱した者を罰する監房がありました。しかも、秩序維持の名の許に規則は無限に拡大され、園長は患者に対して、絶対的権限を持ちました。園長の権限で裁判もなく、所内秩序を乱したと判断した場合、一言半句の弁解もゆるさず監禁しました。それがいかに非人間的、患者を弾圧する政策であっても、それがよしとされたのです。

それは、一億国民を、癩から守るために、たとえ非人間的な面があっても、患者には気の毒だが、犠牲になってもらわなければならないとの事なのです。

戦後、私達の間、人間復帰への意識が目覚めたとき、地元の警察署長を呼び、監房を撤去するよう要請

しましたが、その時の署長の答えは「所内に監房がなければ1千万都民は、枕を高くして眠ることが出来ない」と言うことでした。そこに、いかに非人間的抑圧と搾取が行われていても、1千万都民のために、正しいことになるのです。

この場合、1千万都民のために、犠牲になり、抑圧と搾取に泣いている癩患者は、どうなるのでしょうか。彼らが地上に生まれて来たのは、癩患者として、都民のいけにえになることでしょうか。若しそうだとすると、この犠牲に呪いあれです。このような思想を作り出した犠牲は悪魔のものではないでしょうか。私は若かった故もありましたが、癩者は日本人のために犠牲になるが、癩者のために誰が犠牲になってくれるのか、「俺は、こんな一方的な犠牲は嫌だ」天に向い、地に向い、叫びました。この考えは、今も昔と少しも変わってはいません。

これは、弱者の歪んだ気持なのではないでしょうか。極端なエゴイズムなのではないでしょうか。極めて卑近な例を掲げました。戦争についても、同じ様な考えを持っています。祖国を守るための戦争であっても、その祖国は私にとり益とならないものであれば、協力する事は出来ません。それは祖国という美名の許に、一方的に自己が犠牲になるだけだからです。その戦争によって利益を受けるのは誰でしょうか。戦争を計画した為政者と資本家達です。世界歴史の中で起った

戦争をつぶさに調べるとき、その殆どが少数の権力者の野望を満すために起っています。そして、そのために幾十幾百万の兵士が犠牲になっているのです。戦争が真に肯定される場合は、犠牲となる兵士の益となるものでなければなりません。そしてそのような戦争は、現実には存在しないのです。この意味で、私は戦争を否定します。私自身が、その犠牲になることを望まないからです。

或る友へ

2月28日

犠牲の問題は、私自身が、一億国民の犠牲になれという思想の許に隔離され、その圧政の許に苦しんで来たものだけに、自由と共に最大の関心があります。私の一生は、自由と犠牲を巡っていたと、言っていましょう。

そこで、ハンセン病に関連して、光田健輔の思想に言及しておく必要があります。1953年にライ予防法改悪に反対して、全国的な規模で患者運動が起りました。私達はこれを癩予防法闘争と呼んでいます。私は、この運動を患者運動の原点として定義づけました。

癩予防法改正を巡って、数人の所長が、国会に参考人と呼ばれ、意見を述べています。光田はその中の1人でしたが、彼は、たとえ化学的治療薬に依って癩は癒っても、永

久に隔離し一億国民を、癩から守らねばならぬ事を主張しています。これは光田の哲学理念ですが、彼の要旨を読むとき、私は全身の血が凍るような思いでした。それは、患者にとって死の宣告にも等しいからです。日本の隔離政策が世界の批判を浴びているのも、光田の日本民族を癩から守るといふ哲学理念から出ているのです。

日本では、光田は癩者の父として仰がれていますが、患者の立場からは、断じて容認出来ません。光田は1930年に、多磨全生園から長島愛生園に転任していますが、光田の隔離政策は、罪人を扱うそれと何ぞ変っていません。逃亡を企てた者は容赦なく監房に監禁しました。2回以上企てた者には青竹で殴るといふ体刑を加えました。患者は体刑を加えるK監督を鬼のように恐れましたが、不思議なことに、光田に対しては何のうらみも持たずに却って慕っていることです。K監督に指示したのは光田ですが、両者を結びつけて考えようとはしないのです。光田の勝れた行政手腕に依るものか、彼の二面性に依るものか、ともあれ私は光田のこうした思想について患者の立場から明確にしておかなければならない責任を感じます。20世紀の日本人に、理解出来ないとしても、何時か後の人が光田の隔離政策について正しい評価をくださると信ずるからです。それは日本人の根源的な人間観を示すことになるでしょう。

その意味で現代はすべての根源がかくされていると言えましょう。

光田の思想について患者の立場から、徹底的に批判し抵抗することはハンセン病患者が人間的復歸する条件でありましょう。それは犠牲からの解放であり、自由への道なのです。

第 2 次大戦の際、大陸から引き上げて来た人達の中に、子供を大陸に捨て引き上げて来た者があると聞いています。敵の手からのがれる道はそれ以外になかったのでしょうか。反対に子供と共に死んでいった両親もあると聞いています。この場合、前者の行為がエゴイズムであり、後者の行為が愛であり、犠牲であるとは考えられません。本質においては、前者と同じように、エゴイズムなのです。それは、その子供が両親のものだからで、他人の子供のために死ぬことはないでしょう。この意味でそれは自己愛であり、前者と異なることは有りません。光田の哲学理念と本質において変わりません。光田の哲学は光田が発見した哲学であり、彼はそれに忠実に奉仕しました。その哲学は彼のエゴイズムであり、彼が一億国民のために、癩者のために一生を捧げたのではなく、彼は彼自身に仕えたのです。

大陸に子供を捨てた両親も、子供と共に大陸で死んで行った両親も、自己は自己自身に関ったに過ぎず、その意味では人間は絶望的なのです。人間は純粹に隣人を愛することは出来ないし、犠牲にすることも出来ま

せん。彼が行為するとき、それは自己愛となり、英雄視、になってしまふのです。自己自身に仕えることになってしまふのです。若し純粹に隣人を愛することが出来たとすれば、それは抽象であり、非人格的となってしまうでしょう。

人間が、自我の意識に目覚めたのは、アダムとエバが神の戒めを破り禁断の木の実を喰べたためでした。人間の自我が形成されたのは、神への反逆という絶望的な出来事を通してでした。その自我意識を行使したのはカインのアベル殺害でした。人間のエゴイズムはこうして始ったのです。パウロは罪の首は死であると言っていますが、死はエゴイズムそのものなのです。ですから人間の死はすべて悪と見てよいでしょう。光田の哲学理念も一方を助けるために他方を犠牲にする限り悪なのです。自分達だけ助かりたいために大陸に子供を捨てることも悪であり、子供と共に大陸に死ぬことも悪なのです。戦争は最大の悪です。それは、百千万の死をもたらすからです。この意味で義人はなく、一人もないのです。

イエスは「全世界を設けても、己が生命を失えば何の益あらん」と言っています。人の生命は世界よりも重いという意味でしょう。これは、死と対比して言われているものでしょう。イエスの死は、この意味でエゴイズムの死であり、悪なのです。それは全人類のエゴイズム、悪を追って死なれたことを意味します。

この死が克服されない限り、人間のエゴイズムは解消されないし、罪と悪は克服されません。イエスは神の義となられたということは、死からの復活によってであり、復活をはなれてイエスの義はないし、生もありません。若し復活がないとすれば、イエスは永遠に罪と悪、エゴイズムの中に閉じこめられてしまうでしょう。

私達は十字架の義に固着するのはイエスの死と復活をこの身に帯びることによって、自己を閉じこめているエゴイズムと悪からの解放を意味します。十字架の義に固着することによって始めて隣人を愛し、隣人のために己れを犠牲にすることが出来ます。それは自己に死ぬことに依ってキリストに生かされるからです。隣人を愛することが隣人を生かすことであると同時に自己を生かすことだからです。

療養通信 ~ 1

2月の自治会役員選挙が終わりました。75年も引き続き私が会長の役に就きましたが、2年目とあって気持ちの上では、会長という任をそれ程重く感じていません。しかし、山積する問題を考えるとき、1年目よりもその責任の重要性を痛感します。

全生園のセンター化に依って、先生方の意欲が違って来たように思いますが、それと共に、外来患者が多くなり、国電のラッシュなみになっ

て来ました。急病になっても簡単に病室に入れない、治癒していないに出されてしまったと言う苦情が絶えません。このために一部の患者からはセンター運動をすすめて来た私がいけないのだと非難する者、外来患者を20名に規制すべきだと言う声等、少し混乱気味です。

私はこうした声に出来る限り耳を傾け、忍耐強く説得を続けていますが、時には投げ出したい気持ちになります。けれども今、私が投げ出せば園内はセンターをめぐる大混乱に陥ってしまうでしょう。

全生園は、日本のセンターになるでしょう。否、世界のセンターになることを私は望んでいます。それは、自己中心的な考えから出ているのではなくその医療を世界のハンセン病患者に解放せよと言うことなのです。そうすることが医師、看護婦を集める道なのです。ここでセンターを規制してしまえば、医師は働く意欲をなくし、若い医師を集めることは絶望的となってしまいます。医師にとって必要なのは、新発患者や難病患者等、種々の患者を多く診ることでありましょう。地方施設に医師が希望しないのは、その施設がコロニー化し、治療を必要とする患者が限られていることでしょう。しかもその数は年毎に減少しているのです。センターはこうした減少から脱皮し、難病患者を吸収し医師看護婦に魅力あるものにすることであり、入園者にこのことを理解させるために

は、少し時間がかかることでしょう。

療養通信 ~ 2

自治会業務の半日制は、76年より実施することにし、今年の午後の勤務は当番制にしました。正副会長週に3回、その他の役員は2回で、夏の期間は、午後を休みにしました。

半日制が実施出来なかったのは、自治会業務に生き甲斐を感じている者、半日では業務が消化出来ない者等がいたためです。多くの役員は半日制を望んでいましたが、少数でも、1日勤務を希望している者が居る限り、その声を無視することが出来ず、76年より実施することになりました。

私の場合、土曜以外に半日が2日取れますので、聖書に向ける時間がそれだけふえたことになりよこんでいます。年令の故でしょうか、今年は聖書に集中したいという気持が強いです。詩篇記者は、人の一生は長くて七十年か八十年、とうたっています。その年まで計算出来る年令に達したためでしょうか、もう少し聖書を、勉強したいと思うのです。その聖書の勉強をしている時が、一番楽しい時であり、充実感を味えます。

今年の支部長会議は、5月10日より13日まで、鹿児島星塚敬愛園で開催されることになりました。私はそれに参加することになりますが、本部員と一緒にいくために、

日早く、8日に出発することになるでしょう。

会議は14日解散になりますが、私はそのまま残り、比嘉御夫妻その他のきよおだいと、集会や懇談を持ち、信仰の交わりを深めたいと思っています。今年の支部長会議はその意味で大へん楽しみです。

16日比嘉御夫妻と共に沖縄の愛楽園を訪問します。愛楽園の初代園長は、塩沼英之介先生で、愛楽園を訪問するようにとの推めもあり、見学することにしました。愛楽園には教友がおらず、あまり興味がありません。

18日に宮古南静園を訪問します。南静園には、宮武御夫妻や教会の下沢きょうだい、自治会の与那嶺きょうだい等、関根先生の御講義の録音テープを聞いています。今度の旅行の目的は、これ等きょうだいと比嘉御夫妻と交えて、集会を持つことです。

関根先生の御講義を聴講しているのは、星塚敬愛園と宮古南静園の兄弟達で、文化に恵まれない僻地教友です。比較的文化に恵まれている施設に聴講者がいないのは、信仰とは何かを考えさせられてしまいます。それは、貧しい者、悲しんでいる者、踏みつけられて、じっと我慢している者、義に飢え乾いている者でなければ、先生の御講義は、聞いても判らないということです。その意味で、信仰は厳しいといってよいでしょう。宮古南静園には、3泊くらいを予定

し帰園するつもりです。

全生園には、財団法人の、売店、豚舎があります。この財団法人は互惠会と呼んでいます。2月の改選期に、会長選挙をしましたが、受ける者がなく、自治会に編入してほしいと言う要請がありました。

1969年、私が自治会を再建したのですが、規約起草に当って、互惠会事業を自治会と分離しました。患者の老令化と不自由度を考えるとき、自治会は、互惠会を抱えこんではならない、と判断したからです。その互惠会を編入して欲しいと、要請があったのです。

私は、互惠会代表に、自治会は規約上、事業を起してはいけない事になっている。従って互惠会を編入することは出来ないが、互惠会が会員のものである以上、自治会がその收拾に当らなければならない。その方法として、二つある。その一つは豚舎を閉鎖し、互惠会を縮小し、売店のみとして、自治会長が、互惠会長を兼任する。その2として、互惠会を閉鎖し外部から商人を入れる。

売店の部員は、互惠会を存続させることを望んでいますので、その一方向で話しをすすめています。豚舎の閉鎖は、周辺の住民から閉鎖して欲しいと言う要望が、毎年の如く書類で来ております。こうした地域住民の要望を無視して、豚舎を運営して行くことは、全生園にとって不幸であり、互惠会を引き受けるに当って、閉鎖を前提にしたわけです。

しかし、この問題を通して、私が不思議に思うのは、互惠会理事は、旧自治会の会長や、執行委員が大部分で、健康の面からいっても、私とは比較にならぬほど恵まれているのですが、私に、互惠会会長になって欲しいと言うのです。何故に、こうなってしまうのか、自治会についても同じことなのですが、信仰の問題といえましょう。現代は、社会全体がゆがんでいると言えましょう。

公害問題をおこしている企業の、道義的責任が問われていますが、個人も本質において、あまり変らないと言ってよいでしょう。みな利己の自己中心の生き方をしています。

療養所においても、同じことで、自治活動をする人間は、政治的意識を持った者が、私のような信仰者に限られつつあります。そのために、私が、互惠会の運営にまで入って行かなければならないのでしょうか。患者の老令化と不自由度の進行は、今後、あらゆる面で深刻になっていくでしょう。それは、斜陽化の道をたどっているハンセン病療養所の避けられない歴史的必然なのです。しかし、どのような事態が起きても、主に在って一つなのです。それは、十字架を負うこと以外にありません。そこにだけ私の生きる場所があり、希望があるといえましょう。周囲が破れれば破れるほど、この一点だけが明確になってゆくようです。